

ポエムの窓

解説・高安義郎



A window of a poem

生きる

篠崎 康文

酒も煙草も

のままで

女も賭博も

にも手をださず

泣きごと

いわざ生きてきた

旅や旅行も

で

レストランにも食堂にも行かず

泣きごと

いわざ生きてきた

友人の葬儀や結婚式も

で

交通事故に

あい 何の補償もなく

何一つ趣味ももたず

泣きごと

いわざ生きてきた

金も財産もなく 人から変わり者といわれ

社会から遠くはなれ いつも孤独で

泣きごと

いわざ生きてきた

下卑な女に莫迦にされ

近隣の人に無視され

泣きごと

いわざ生きてきた

生きる本能の欲望が枯れ

無能力者として扱われ

それでも 泣きごと

いわざ生きてきた

生きる道を遮断され

八方ふさがりに苦悶し

狂人とのしられ途方にくれた

兄弟からも見放され

八方ふさがりに苦悶し

狂人とのしられ途方にくれた

(平成九年七月一五日)

この作品の作者は篠崎康文という、才能あふれる芸術家で、私の古い友人の一人です。ですが残念なことに、彼は十五年ほど前に病没しました。彼は大学を出てすぐに、さる信用金庫の社員となりましたが、若い頃から描き続けていた絵画の世界に身を置く決心をし、会社を辞め、絵を描くことに没頭し始めました。

そうして描いた作品は種々の展覧会で幾つもの賞を取り、彗星のように現れた天才画家として取り上げられたこともあり、もてはやされたこともありました。

ですが、芸術とは何なのでしょうか。才能あふれる作品を描いているにもかかわらず、彼の絵はほとんど売れず、やがて、その日の生活にも事欠くようになります。

その頃詩に興味を持ち始めたようで、私の詩の師匠である荒川法勝先生を頼り、私達の同人となりました。

私たちの同人雑誌『玄』はそのころ年二冊ほど同人誌を発行しておりましたが、表紙絵を彼に依頼することとなりました。

その後十年ほどの間に篠崎氏は他界され、師匠の荒川先生も亡くなられてしまいました。その後、同人数が少なりなりながらも続ける同人会『玄』の雑誌には、今も篠崎氏の差し絵を使わせていただいているいます。

篠崎氏は、千葉県の某病院に長く入院されていました。私は何度もお見舞い

に行かせてもらいましたが、彼はとても喜んでくださり、枕元に置いてあった数冊のスケッチブックと、詩作品や隨筆を記した大学ノート数冊を私に託されました。

本日ここに紹介させていただいた詩は、その大学ノートの最初に記されていました。

この作品には、芸術で身を立てようとして思うように行かなくなつた人間の、典型的な人生が記されているようと思え、私は胸が締め付けられる思いで取り上げました。

私も若い頃、文筆一本で生きることを考えたことがありました。私の師匠は、「芸術で生きることはリスクの多い賭のようなものだ。それは才能のあるなしとは関係がない」と諭され、私は師匠と同じ高校の教員になり、何とか世間並みの生活を送ることができたのですが、世の中には、この大きな賭に打つて出る芸術家の卵が沢山いるようです。実際世に名を残し成功した作家や芸術家の多くは、幸運に恵まれて賭に勝利した人たちです。しかし、おそらくその数百倍、数千倍の卵達は、この詩の作者のように才能を誰にも知られることなく、理解されず名前すら埋もれてしまつてしているのです。

私も彼のように無一文で寂しい人生を送っていたかも知れないことを思うと、この作品は人とのようには思えず、紹介することにいたしました。

